

『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (19)

ルシル・デューリー

A Study of *The Life of Charlotte Brontë*

芦澤久江

1. はじめに

20世紀になると文学において心理学的解釈が導入され、ロザモンド・ラングブリッジ (Rosamond Langbridge) などがシャーロット (Charlotte Brontë, 1816–55) の深層心理を分析し始めた。ラングブリッジはシャーロットが父親によって自己犠牲を強いられ (5)、また死の恐怖をつねに感じていたと分析している (28)。しかしラングブリッジの研究は心理学的にシャーロットを分析してはいるが、論拠が不十分でシャーロットの深層心理を解明しているとはいえない。その後ロバート・キーフ (Robert Keefe) は、シャーロットが死に対する恐れを感じているだけでなく、自分が生き残ってしまったことへの罪悪感さえ覚えるようになったと主張する。また深層心理の観点から、メイナード (John Maynard) のようにシャーロットの性的欲求を分析する批評もある。深層心理を探るということは、シャーロットの隠された部分を明らかにし、彼女をより深く理解するために、重要な研究方法の一つである。ラングブリッジ以前にルシル・デューリー (Lucile Dooley) はシャーロットの深層心理に父親の影響が強く見られるということを明らかにしている。また彼女の論文が文学雑誌ではなく、アメリカの心理学雑誌に掲載されていることも大変興味深い。そこでデューリーはシャーロットの深層心理をどのように分析しているのか考えてみたい。

2. 父親の影響

デューリーはシンクレア (May Sinclair) ほどシャーロットについて心理学的分析において深い洞察力を示している者はいないと述べ、賞賛している (221)。シンクレアはギaskell (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810–65) の『シャーロット・ブロンテの生涯』 (*The Life of Charlotte Brontë*, 1857) を読んで共感し、シャーロットを聖女として崇めていた。というのはシンクレアの境遇はシャーロットの生涯以上に悲しみに満ちていたからである。シンクレアの父親はブランウェル (Branwell Brontë, 1817–48) のようにアルコール中毒で破産し、きょうだいも相次いで亡くなった。シャーロットよりも悲劇的な生い立ちのなかで、シンクレアはシャーロットをロールモデルとして、不屈の精神で自分の運命を切り開いて作家にまで昇りつめたのである。前述したようにデューリーはシンクレアの子どもに対する態度についての分析を高く評価しているが、

実際にはシンクレアはあまりにもシャーロットを神聖視するあまり、論理のこじつけも見られる。例えばシャーロットがエジェ氏を愛していたということを受け入れられず、その事実を否定している。つまりシンクレアは自分自身の生涯とシャーロットの生涯を重ね合わせているので、そこにはシャーロットへの肯定的な見方が展開されていて、公平な態度とはいえないのである。

シンクレア以前に心理学の知識が特別ないけれども、心理学的な視点からの分析をして優れている人としてスウィンバーン (Algernon Swinburne, 1837-1909) とチェスタトン (C. Gilbert Keith Chesterton, 1874-1936) をデューリーは挙げている (222)。チェスタトンはブロンテについて次のように述べている。

Upon the whole, therefore, I think it may justifiably be said that dark wild youth of the Brontës, in their dark wild home, has been somewhat exaggerated as a necessary factor in their work and their conception. The emotions with which they dealt were universal emotions of the morning of existence the springtide joy and the springtide terror. Everyone of us as a boy and girl has had some midnight dream of nameless obstacle and unutterable menace in which there was, under whatever imbecile forms, all the deadly stress and panic of 'Wuthering Heights'(sic). Everyone of us has had a daydream of our own potential destiny not one atom more reasonable than 'Jane Eyre'(sic). (11-12)

デューリーはチェスタトンがブロンテの子ども時代の感情に着目している点を評価している。なぜならデューリーはブロンテの子ども時代を分析することが非常に重要だと考えているからである (222)。デューリーはシャーロットを本質的にはノイローゼだったとみなし (222)、彼女には抑圧された情熱の履け口を見つけようとする魂の葛藤があったとしている (223)。そしてその抑圧には父親が深く関わっており、それゆえシャーロットにとって子ども時代の父親の存在がどのような影響を与えているかがシャーロットの性格分析をする上で必要なのである (Dooley 223)。

まず性格を分析するに当たり、デューリーは遺伝的側面と先天性の傾向を考慮する必要がある、遺伝的なものは性格の基盤であると述べている (224)。なかでも繊細な性質は感情的な刺激によって正常な道からそれていくが、そうした傾向はノイローゼや天才の成長に見られる (Dooley 224)。

そこでデューリーはまず父親のパトリックの性格を分析している。デューリーによれば、父親のパトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) はヒポコンドリアであり神経症的な消化不良だが、鬱気味で不屈の精神を持っている点はシャーロットと似ている (224)。つまりシャーロットが生涯ノイローゼでヒステリックな性質はパトリックから由来するとデューリーは考えていると思われる。

ブロンテが両親からの遺伝として受け継いだもののなかで良かったことは、書く才能であった。ブロンテの両親は二人とも書くことにおいては平均以上だったというのである (Dooley 224)。その結果、6人の子どものうち、少なくともマライア (Maria Brontë, 1814-25)、シャーロット、

エミリー (Emily Brontë, 1818-48) の三人は天才だった (Dooley 225)。すなわち両親から受け継いだものは否定的なものばかりではなく、書くことにおいて優れた才能を受け継いだということである。

ブロンテの住んでいた家は人里離れた、わびしい場所にあったとされており、他者との交流がなかった点は考慮すべきであり、したがってシャーロットの子ども時代において他者よりも家族の影響、いわゆるファミリー・コンプレックスがあったということは重要なことである (Dooley 226)。前述したように、家族のなかでも特に父親が彼女の生涯に大きく影響を与えており (Dooley 226)、デューリーは父親パトリックの性格について次のように述べている。

Patrick Brontë's character was contradictory mixture of reserved, sensitive pride and rugged stoicism, of sternness amounting to harshness and half-ashamed tenderness; he was self absorbed but had strong fatherly feeling. (226)

デューリーはギaskellが描いたパトリック像は誇張されている (226) としながらも、彼の子どもたちは彼と自由に感情を共有することはできず、彼の存在そのものが子どもたちに緊張を与え、おのずと子どもたちに自己抑圧を強いさせたと述べている (226)。パトリックの性格には矛盾した側面があったかもしれないが、デューリーがパトリックの性格をなぜそのように断定しているのか証拠はまったく挙げていない。さらに子どもへの彼の態度もまた公平に判断されているかについては疑問が残る。ただ、デューリーの主張はパトリックの性格分析がすべての基礎になっているので、これを疑問視すると、彼女の論拠はすべて失われてしまうことになるので、ここではパトリックの性格についてこれ以上追及しないでおく。

デューリーによれば、子どもたちは彼に心を寄せることはなく、喜んだり、悲しんだりという感情を彼と共有することはなかった (226)。なぜならもし子どもたちが自由に自己表現したら、パトリックがいつ怒り出すかわからなかったからである (Dooley 226)。またパトリックは子どもたちの肉体と魂には厳しくすることが大事だという18世紀的な考えを持ち、子どもたちには肉体の喜び、すなわち食べ物、洋服、社交界に対して無関心でいてほしかった (Dooley 227)。

パトリックの規則は子どもたちを支配していたが、彼は書斎に閉じこもっていたので、子どもたちのいさかいの詳細を聞くことはできなかった。しかしそれは母親の役目であった。シャーロットは5歳のときに母親は亡くなっていたので、そうした役目をする人はなく、父親には憧れを抱くとともに従属、敬意、恐怖を感じていたのである (Dooley 228)。

ミセス・ギaskellはシャーロットが亡くなる前、ハワースを訪れたとき、シャーロットの父親に対する態度は子どものようなもので、パトリックもシャーロットを子ども扱いでしていたと記録している (Gaskell 508)。こうしたことからデューリーは二人の絆が子ども時代よりも強くなっていると分析している (228)。

これまでシャーロットの性格の鍵は父親への献身であったとされてきたが、シャーロットの友人

メアリ・テイラーは、才能を持ったシャーロットがそれを発揮しないで父親への務めを果たすことに反対であった。ところがシャーロットは父親に孝行することが決して過ちだとは考えていなかった。それはサウジーへのシャーロットの返信にも見られるし、父親を置いたままロンドンへ行くことを拒否したこと、シャーロットがプロポーズを断っていたこと、最終的には結婚するが、それも父親のためだったことから明らかであるとデューリーは主張している (228)。またパトリックがいかにシャーロットに影響を与えているかという証拠でもあると言う (Dooley 228)。デューリーの心理学的分析によれば、シャーロットのパトリックへの感情は献身的でありながら恐怖も感じ、その気持ちは一人前の女性の愛ではなく子どもの愛であったのである (228-29)。このように父親の影響が支配的となり、その気持ちはやがて結晶化し、フロイドの言葉を借りれば「固着」(“fixate”) し、成長の妨げとなったのである (Dooley 229)。

父親の影響が強かったことはすでに述べたとおりだが、その他の家族との関係はどうなっていたのか。シャーロットが9歳のときに、カウアン・ブリッジで二人の姉が亡くなったことは非常にショッキングな出来事だったことは知られているが、シャーロットは精神的にも肉体的にも恐怖を感じていたという (Dooley 230)。これは『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) のローウッド学院で描かれているので、明白なことだろう。しかしデューリーの分析によれば、シャーロットは姉を失くした結果、エミリに愛情を注ぐようになり、エミリはアン (Anne Brontë, 1820-1849) に愛情を注いだと述べている (230)。シャーロットはブリュッセルに行く際にアンではなくエミリを同行させていることから、デューリーが述べていることは確かかもしれない。ところがシャーロットがどれほどエミリに愛情を注いでも、エミリはアンに愛情をより強く持っていたので、シャーロットは愛を注いでも愛されることはなかったのである (Dooley 230)。デューリーはここでは述べていないが、この論理をさらに一歩進めるとシャーロットの報われない愛というのは異性、すなわちエジェに対してだけでなく、こうした姉妹の関係にもあったということかもしれない。そうしたフラストレーションが原動力となり、彼女の情熱を爆発させるエネルギーとなったと言うこともできるのではないと思われる。

デューリーは伯母については、子どもたちに愛情を注ぐような人ではなく、むしろ敬意と尊敬を要求していたと述べている (230)。また彼女は敬虔なメソディストであったため、彼女の規則は子どもたちにとっては退屈で共感を得られなかった (Dooley 231)。それゆえ、伯母の存在がシャーロットと父親の関係を壊すようなものではなく、むしろ彼らの絆を強めたとデューリーは分析している (231)。

シャーロットと父親の関係において性的な要素があったかということに関して、デューリーははっきり断定していないが、それに近いものがあったとしている (231)。母親が病気るとき、パトリックは彼女にかかりきりで看病をしたと言われているが、それがシャーロットにとっては嫉妬を起こさせ、シャーロットは幾分妻気取りであったということである (Dooley 231)。もしそうでないとしても父親パトリックの側には明らかにシャーロットへの執着が見られるのは明らかである (Dooley 231)。パトリックはシャーロットの結婚に反対し、他の誰かにシャーロットを取られる

ことを強く拒否していたことから、シャーロットに近づく男性に嫉妬していたとデューリーははっきり述べている (231)。シャーロットの繊細な性格は父親への気持ちの成長において障害となっていく (Dooley 231)。すなわちナイーブで、未熟で、幼く、大人びている性格は天才の特徴であるように、シャーロットの小さく、はにかみ屋で、奇妙に人に頼っているかと思えば独立心があり、すぐに衝動に駆られると思うと、引っ込んだり、仲間のなかで自信がない態度を表すのとは対照的に創造の世界では自分の考えの正しさに確信をもつといった二律背反した性格は彼女の中にある幼児性の表れなのである (Dooley 232)。

3. 思春期

思春期において、子どもじみた特徴は強くなったり、弱くなったりしていきながら、身体にも変化が訪れる (Dooley 232)。この時期は方向性や成長が決定づけられるので、子ども時代と同じように重要で、新たな特徴が加えられる (Dooley 232)。シャーロットの思春期について言うと、心理学的には思春期であるが、情緒面では十分に成熟していない一方で、普通の子どもがする経験と感情は、彼女の場合すでに思春期以前に起こっている (Dooley 232)。思春期において少女は自意識と性の意識に目覚め、父親を新たに恐れるとともに、父親に対して恥ずかしさを覚えるが、母親には、時には年上の女性として共感をし、理想化したりもする (Dooley 233-34)。そして一般的には少女たち母親の真似をしながら、自己認識に至るのである (Dooley 234)。

シャーロットの場合、最初のプロポーズを断ったときに「わたしはオールド・ミスになるでしょう」と述べ、もう二度と結婚できないという恐れを抱いているが、これは普通の結婚生活を望む気持ちと子ども時代の父親への愛着を示している (Dooley 234)。ここからシャーロットの性格は変わっていく。以前ハワースの召使はシャーロットを「明るく、陽気で、自立心をもっていた」と語っていたが、思春期になるとシャーロットははにかみ屋で、自信がなく、古風な性格になってしまった。またシャーロットは思春時代に経験すべきことを越えて成長しなかった (Dooley 234-35)。その一方で彼女は自分を表現したいという願望が強く、それは絵を描いたり、物語を書いたりすることに向かっていったのである (Dooley 235)。

シャーロットの小説において両親が登場するものはなく、ヒロインは孤児で自分の道を自ら歩んでいくが、ここには父親の影響が出ている (Dooley 236)。ギaskellもこれに関連し、パトリックが人を信じなかったのではないかと推測し、そうした影響によってシャーロットもまた友人たちとの約束に懐疑的となっている (Dooley 236)。つまり相手をあまりにも愛しすぎてはいけない、相手をうんざりさせてはいけないという恐れからシャーロットは相手に望みをもつことをしないのである (Dooley 236)。ところがシャーロットの劣等感、自己卑下は父親と自分が対等ではないという意識からというのではなく、ブランウェルに関連しているとデューリーは指摘している (236-37)。というのはブランウェルはシャーロットをはじめとする他の姉妹よりも愛情を注がれ優遇されて育ったからである。シャーロットは女性が男性のために譲るべきだというポリシーに従いなが

らも、潜在意識においてはそうした不平等に反抗し、ブランウェルに対しては愛しているだけに憎しみと怒りの感情が混じり、相反する複雑な気持ちを持っていたのである (Dooley 237)。

シャーロットはエミリに男性的な面を見たり、親友との戯れなどから、ホモセクシャル的要素があったとデューリーは述べている (239)。その証拠としてシャーロットはローヘッドでエレンのそばで寝ていると安らぎを得ることができたということを挙げている (Dooley 239)。しかしデューリーはそれ以上の見解を示さず、これ以上深くは言及していない。

シャーロットの性格を特徴づけているもののなかには肉体的劣等感というものも挙げられる。メアリ・テイラーから容姿の醜さを言われたシャーロットは生涯それをコンプレックスとして持ち、自分が他の人とは違うということを意識するようになる。しかしそうした孤独感、劣等感をシャーロットは想像力の世界で補っていた (Dooley 241)。シャーロットの天才的なところは知性ではなく情熱的な面なので、子どもの頃に書いた初期作品にはまだ天才の兆候は見られない (Dooley 241)。デューリーは思春期の兆候としてヒステリックな兆候があるが、少女たちは成熟するにつれ、それは消えていく。ところがシャーロットは二重人格ともいえる内的自己との対話があったとしている (Dooley 241)。

シャーロットの思春期をまとめると、13歳から22歳まで頭痛、背中の痛み、不眠症、思い込み、禁止された食べ物、神経症、鬱といったヒステリーの兆候があり、成熟するにつれ、その症状は増していくのである (Dooley 243)。

4. さまざまな経験

前述したように、シャーロットには相反する感情があり、二重人格の傾向があったが、成熟し、自立したいという野心と欲望ももっていた。これはシャーロットの男性的な面であり、自己肯定的な面と言える (Dooley 244)。一方、シャーロットが障害を前に不可能だから止めた方がいいと感じたりしている面は受動的で女性的側面である (Dooley 244)。その裏側には家族から、父親から離れないようにという思いがあり、父親とともにいることが彼女の務めだと信じて疑っていなかった (Dooley 244)。すなわちシャーロットは二つの自己の間でバランスを取っていたということである。

実際シャーロットは家庭教師という職業につき、次には学校設立を計画し、自立の道を図ろうとしていた。家庭教師は彼女にとって精神的、肉体的に合わず、成功とは言えなかった。なかにはシャーロットが子どもたちへの愛情が欠けていたからと家庭教師には不向きだったとする説もあるが、デューリーはシンクレアの説を基にこれを否定している (243)。なぜならシャーロットは子どもたちからの愛情を勝ち取ることができ、小説にも子ども時代の苦しみへの共感が表されているからである (Dooley 245)。

ある女性の心理学実験で、子どもから連想する感情をその女性に尋ねると、彼女はまるで叫びたい気持ちに駆られると答えた (Dooley 246)。彼女はヒステリーの肉体的兆候を持っていたが、心

理分析によれば子ども時代の父親への強い愛着、そのあとには思春期の反抗、怒りとなり、さらには母親と重ね合わせ、結婚すること、母親になることの嫌悪を伴うとしている (Dooley 246)。またある女性は子どもを見るとなぜか涙が止まらなくなるが、この女性も子ども時代、思春期に同じような背景をもっていた (Dooley 246)。この二つの例により、シャーロットも子どもに関する痛ましいコンプレックスがあったことがわかる (Dooley 246)。彼女の母性は幼いきょうだいに向けられたが、あまりにも年齢が近く、それは満足のいくものではなく、また他の女性の子どもを世話をするのは喜びより苦痛であったのである (Dooley 246)。

デューリーによれば、シャーロットにとって家庭教師の経験は彼女の内的成長において重要であったと言う (246)。彼女は子どもに対していいイメージを持っていたが、家庭教師先のシジウィック家で子どもへの幻滅を感じた (Dooley 246)。シャーロットはプライドを傷つけられただけではなく、子どもたちに自分が実際には役に立たず、その世界から遮断されていたということを知る (Dooley 247)。シンクレアはシャーロットが結婚願望を強く持っていたため、他の女性の子どもを見るのが耐え難かった (Sinclair) と述べており、彼女の複雑なコンプレックスを明らかにしているとデューリーは述べている (242)。

シャーロットはエジェから知的面からも、情緒的側面からも影響を受けた (Dooley 249)。ギャスケルはシャーロットがエジェに恋愛感情を抱いていたことを知りながら、伝記においてはシャーロットが妻子ある男性を好きであることを隠していたことはよく知られている。シンクレアはシャーロットを崇拜していたので、妻子ある男性に恋心を抱くシャーロットを想像することができなかったのである。しかし現代においてはシャーロットのエジェ宛てのラブレターが残っており、この事実を否定することはできない。デューリーもシャーロットは確かにエジェに恋をしていたとしながらも、シャーロット自身がその気持ちを意識していなかったと述べている (250)。シャーロットが『ジェイン・エア』を書くことができるようになるのは、彼女自身がエジェを好きだという気持ちを深く理解することが必要であったとデューリーは述べている (252)。その結果シャーロットはエジェへの抑圧された想いを作品に向けて描くことができたので、ブリュッセルでの経験こそシャーロットを夢見る人ではなく積極的に働く女性に変え、現実を見るようにさせたのである (Dooley 253)。その現実とはハワースの生活に身を置くことであり、同時に夢に破れた絶望も意味していたが、シャーロットの場合絶望はある意味安らぎでもあった。憧れと同時に恐れもあり、そうした気持ちを安堵させもしたのである (Dooley 255)。シャーロットの作品のすばらしさは文体やプロットではなく、こうしたシャーロット自身が経験した心の葛藤が表れているからなのである (Dooley 256)。

次にデューリーはシャーロットの結婚について分析している。デューリーの見解では、無意識には父親に執着し、意識の上では娘としての務めを果たすという気持ちから、シャーロットはプロポーズを断り続けた (257)。それではなぜシャーロットは結婚したのか。それはニコルズ (Arthur Bell Nicholls) の誠実な愛が彼女の母性を刺激し、また一方では無意識に年老いた父親を守るためにニコルズが必要だと考えたというのである (Dooley 257)。確かにこのときシャーロットはきょ

うだいをすべて失い、年老いた父親を抱え、心細くなっていたのであろう。それゆえデューリーが述べるように、父親のためにも結婚をしようとシャーロットが考えたのは一理あると思われるのである。

ところがデューリーはこの結婚は前進ではなく、後退だったと述べている (258)。ニコルズはシャーロットの文筆活動に関心がなく、書くのを止めほしいと考え、それがシャーロットには新たな制限となった (Dooley 258)。したがって結婚が長く続いたら、シャーロットは幸せではなかったであろうとデューリーは述べている (258)。シャーロットの死の原因は記録が十分ではないので、はっきりしない。吐き気は妊娠のためのつわりだったと推測されるが、彼女の病気は新しい生活で直面する恐れとためらいにより一層悪化したと考えられる (Dooley 258)。言い換えると、長年の抑圧によって生じた抵抗だけでなく、母親になりたくないという自責の念があったとデューリーは述べている (259)。デューリーはシャーロットの死が直接結婚による抑圧から来たものではないとしても、この時のシャーロットの精神状態はこれまでに感じたことがない恐怖と疲れがあり、死の原因の一つになったとしている (259)。デューリーの分析は驚くほど逸脱してはいないかもしれないが、証拠が挙げられていない。シャーロットは精神が細やかだったので、新生活に対する不安と妊娠から来る肉体的変化に戸惑ったことは間違いないかもしれない。しかしそれは推測にすぎず、シャーロットの精神状態がどうであったかは明らかにすることはできないのである。

5. 『ヴィレット』

デューリーはシャーロットの性格が最終的に表現されているのは『ヴィレット』 (Villette, 1853) であり、ルーシーはまさにシャーロット自身であり、無意識の自己がもっともよく表されていると主張する (260)。ルーシーはノイローゼの主人公で、これほどノイローゼの性格を表した作品はないとデューリーは言う (261)。ルーシーは無表情で傍観者を装っており、人と付き合うより孤独を好んでいるが、実際には長い休暇になると孤独に耐えられなくなる (Dooley 261)。

ノイローゼの特徴的な兆候は機械的動作であり、ルーシーが孤独のなか熱に浮かされたように歩くのはまさにそれである (Dooley 262)。さらにルーシーが見る夢は見知らぬ力との葛藤で感じる恐怖を表し、家族との別れによる苦しい経験から起こっており、早発性痴呆を患う人の症状にも類似しているとデューリーは指摘している (263)。

さらに『ヴィレット』はファザー・コンプレックスがよく表されている作品でもあるとデューリーは述べている。この作品で注目すべき点は関心がポリーからルーシーに移っていることである (Dooley 264)。ポリーは母親を失くしているが、その影響はあまり受けていない。なぜなら母親が軽率で子どもの世話をしなかったからである。しかし母親がポリーの育児を放棄していたということをなぜ書く必要があったのかとデューリーは問う。そこにはシャーロット自身の母親が幼いころに亡くなり、何もしてもらえなかったという無意識が反映されているのである (Dooley 264)。

ルーシーはポリーを冷静に観察しているように見えるが、実は無意識にポリーに共感していると

いうデューリーの視点は興味深い。デューリーが述べているように、ポリーは最初に登場するが、その後の展開で重要な役割を果たしていないので、確かに不自然である。デューリーの深層心理を分析する視点は、『ヴィレット』の解釈を広げているということと言える。

デューリーによれば、精神分析学者にとって、さらに重要な点はポリーの愛情が父親からグレアムに移る点である (264-65)。グレアムはポリーの遊び相手となり、やがて彼女の心を射止めていくが、それは男性の支配と女性の従属を示している (Dooley 265)。また二人の姿は父親と娘に結びつく特徴でもある (Dooley 266)。最初ルーシーは語り手として冷静で皮肉な性格を持っていたが、物語はやがてポリーからルーシーの話に移っていく。それはシャーロット自身がブリュッセルで経験したものであるが、ルーシーが先生となっていく展開になると、彼女は冷たく、禁欲的な性格から情熱的な性格へ変わっていき、ルーシーの魅力が増していき、主人公の立場をルーシーが奪うことになるデューリーは分析している (265-66)。しかしルーシーとグレアムでは釣りあわず、そこへポールを登場させ、グレアムとポリーというペアからルーシーとポールの恋愛を描くことになるデューリーは述べている (267)。またデューリーは、シャーロットの実際の経験と感情から来ているものであるので、第三巻から物語は強烈で印象的になっており、『ジェイン・エア』より素晴らしく、夢のようになっていると主張する (267)。すなわち『ヴィレット』はシャーロットの内的葛藤がもっともよく描かれているというのである (Dooley 267)。

『ヴィレット』も『ジェイン・エア』もシャーロットが無意識であっても父親と娘の関係を描いていることに変わりはなく、道徳的に許されない関係である。そこでそれを解決するために、『ヴィレット』においてはポールを海に沈めてしまうことになるのである (Dooley 269)。

6. おわりに

デューリーの分析はラングランドの心理分析に比べれば、示唆に富んでいる。例えばシャーロットと父親の関係が『ヴィレット』のなかにどのように影響しているかという分析は興味深い。ジェインとロチェスターに父娘の関係を重ね合わせることは容易に想像がつくが、ポリーとグレアムもまた父娘の原型であるとしているという視点は新たなものである。シャーロットの意識していない深層心理の分析は、彼女の性格だけでなく作品の相互理解にもつながっていく。言い換えれば無意識の世界の探求は思いがけない展開があり、テキストの新たな読みの可能性が生まれていくのである。

引用文献

Chesterton, G.K. *Twelve Types*. London: Arthur L.Humphreys, 1902.

Dooley, Lucile. "Psychoanalysis of Charlotte Brontë, as a Type of the Woman of Genius", *American Journal of Psychology*, vol.31, no. 3, July 1920, pp.221-72.

『静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部 紀要第20号』

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*., edited by Alan Shaelston. Penguin Classics, rep.1985

Langbridge, Rosamond. *Charlotte Brontë: A Psychological Study*. London: William Heinemann Limited. 1929.

Sinclair, May. *The Three Brontës*. London: Hutchinson and Co., 1914.